東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　38：1 ～ 21, 2012

留学生の辞書使用についての実態調査

–東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析–

鈴木　智美

【キーワード】「全学日本語プログラム」（JLPTUFS）、留学生、日本語学習、辞書、「JLPTUFS 作文コーパス」

１．本稿の目的

本稿では、東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下「センター」とする）における「全学日本語プログラム」（JLPTUFS）[1]の受講生を対象に、2011 年 1～2 月に実施した「辞書」の使用についてのアンケート調査の概要を報告し、その結果について考察することを目的とする。

また、本センターにて作成した「JLPTUFS 作文コーパス」[2]を参考にしつつ考えると、今後日本語学習者の文章産出を効果的に支援するためには、辞書について以下の２つの側面から考えることが必要ではないかという点を指摘する。

１つは学習者の辞書使用のスキル養成という側面である。辞書の使用者である日本語学習者には、特に中級の入口の段階から上級にかけて、辞書の効果的な使い方を学習ストラテジーの１つとして自覚的にとらえ、自律的学習の確立に役立てて い

[1] 東京外国語大学「全学日本語プログラム」（JLPTUFS:Japanese Language Program, Tokyo University of Foreign Studies）は、交流協定校からの交換留学生、日本語・日本文化研修留学生、教員研修留学生、国費・私費の研究生、予備教育課程の国費研究留学生など、非正規の留学生を対象とした全学的な日本語プログラムである。初級から超級までの 8 段階のレベルがあり、2011 年度秋学期現在、計 45 の日本語科目が開講されており、1 週間の延べ開講コマ数は、計 90 に上る（1 コマ＝90 分の授業）。受講者総数（履修登録者数）は 2004 年春学期（プログラム開始時）189 名から始まり、2009 年度春学期 192 名、同秋学期 182 名、2010 年度春学期 206 名、同秋学期 186 名、2011 年度春学期 157 名、同秋学期 163 名となっている。学習者 1 名の平均受講授業数は、週 6～7 コマである。学習者の出身国・地域は、アジア、中東、北米、中南米、欧州、太平洋、アフリカと世界各国・地域にわたっている。

[2] 広く日本語教育研究に資することを目的とし、上記「全学日本語プログラム」（JLPTUFS）で書かれた学習者の作文（期間：2009 年～2010 年）のうち、執筆者によるデータ提供の同意の得られた作文を、基本的な作文執筆情報とともに電子データ化したものである。情報一覧ファイル（EXCEL 形式）から、当該作文のテキストファイルおよび PDF ファイルへリンク付けを行い、全データを 1 枚の CD に収録して配布している。国籍・母語背景および日本語レベル等、多様な学習者の作文データが計約 1,500 件収められている（詳細については、東京外国語大学留学生日本語教育センター 鈴木・中村(編)（2011）および「JLPTUFS 作文コーパスのご使用にあたって（http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/SUZUKI_Tomomi/paper/JLPTUFS_Corpus_readme.pdf）を参照されたい）。

くことが必要ではないかと思われる。

２つめの側面は、言うまでもなく学習リソースである辞書そのものについての改良である。日本語学習者を対象に考えた場合には、特に良質な例文を多く提示する工夫がより求められると思われる。

２．留学生の辞書使用について：アンケート調査の背景

上記「全学日本語プログラム」受講者による授業評価アンケートでは、7～8 割の回答者が、学習リソースとして「辞書をよく使う」と答えており[3]、学習者にとって「辞書」は、非常に身近な学習リソースとなっていることがうかがわれる。しかし、学習者が使用する「辞書」とは一体どのようなものなのだろうか。学習者は、それをいつ、どのように使用しているのだろうか。

また、鈴木（2010）では、上記「JLPTUFS 作文コーパス」に収録された初中級レベルの学習者の作文を対象に、そこに観察される不自然な表現（日本語として慣習的に定着しているとは言えない表現）を「辞書」使用の観点から分析した[4]。日本語学習者が文章表現を行う際に、“言いたい”日本語の表現を的確に見つけるために、「辞書」にできることは何だろうか。

本研究では、日本語学習者にとっての「辞書」のあり方について考察するために、まず上記「全学日本語プログラム」の受講者を対象にアンケート調査およびインタビュー調査[5]を行い、留学生の辞書使用の実態を調べることにした。

３．アンケート調査の概要

アンケート調査の概要は以下の通りである。

(1) 調査時期：2011 年 1 月～2 月（調査期間は約 3 週間）

(2) 調査方法：アンケート調査用紙を配布し、回答後に回収

(3) 調査対象：「全学日本語プログラム」履修対象者

(4) 調査内容：

① ふだん使っている辞書について

a. 日本語を読んだり書いたりする際に、どのような辞書を使っているか。

b. 日本語を使ってどんな活動をする際に、辞書を使っているか。

---

[3]「全学日本語プログラム学生アンケート集計結果」（2009 年度春学期・秋学期）

[4] 学習者の母語あるいは第二言語等からの辞書を介したいわば「直訳」により引き起こされていると考えられる不自然な漢語表現の使用、また既存の辞書からは的確な表現を探し出すことができないという問題から生じていると思われる不自然な句単位の表現が観察された。

[5] インタビュー調査の詳細については、稿を改めて報告する。

c. 日本語で文章を書く時、どのタイプの辞書をどのぐらいよく使うか。

② 辞書に載っている例文の評価

③ 使用している辞書の詳細（説明言語、アプリケーション名など）

④ 辞書を使用する際に不便だと感じることや、辞書を使用する際に気をつけていることや工夫していること

⑤ 日本語レベル・国籍・母語・専門・来日回数・日本語の勉強の目的など

⑥ インタビュー調査への協力の可否

(5) 調査言語：日本語・英語を併記

(6) 有効回答数：117 部[6]

４．調査結果と分析

4.1　調査対象者

(1) 日本語レベル

	初級		中級			上級			計
JLPTUFS 日本語レベル	100	200	300	400	500	600	700	800	
回答人数（人）	13	5	12	25	21	5	20	16	117

回答者の日本語レベルは初級から超級まで全レベルにわたる。およそ 3 段階に分けると、初級 18 名、中級 58 名、上級 41 名となり、中上級レベルの回答者が約

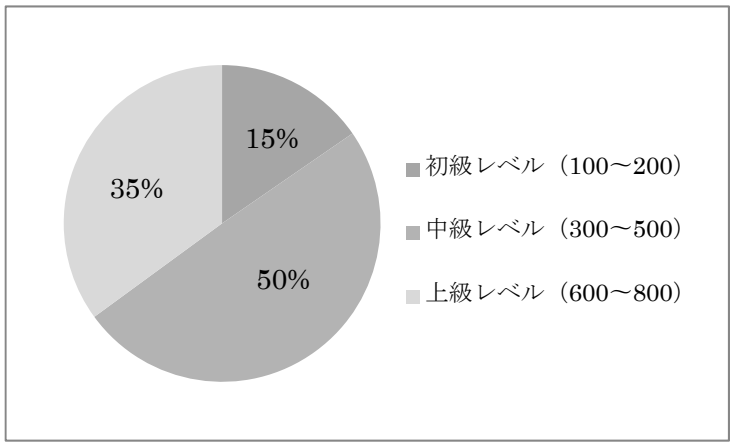

図１　回答者の日本語レベル

[6] 調査を実施した 2010 年度秋学期の履修登録者総数は全 186 名である。総合クラスの履修者を中心に 130 名にアンケート調査用紙を配布し、117 名から回答を得た（回収率 90%）。

85%を占めた。内訳は初級[7]（100）レベル 13 名、初中級（200）5 名、中級１（300）12 名、中級２（400）25 名、中上級（500）21 名、上級１（600）5 名、上級２（700）20 名、超級（800）16 名の計 117 名である。

(2) 国籍

回答者の国籍は計 42 の国・地域にわたる。アジア地域 50 名、欧州 49 名、北米 7 名、中南米 3 名、中東 5 名、アフリカ 2 名、大洋州 1 名である[8]。

4.2　使用している辞書について

まず、留学生がふだん日本語を読んだり書いたりする際に、どのような辞書を使っているか、辞書の種類別にその傾向を調べた結果を見る。

(1) 書籍タイプの辞書

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	8	8	27	32	39	3	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせ、書籍タイプの辞書をよく使うと答えているのは全体の約 14%[9]と少ない。一方、「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、このタイプの辞書を使わないと答えている者は全体の 61%になる。よく使うと答えている者の日本語レベルは、16 名中 12 名が中級（300～

[7] ここで各レベルに付した「初級」等の名称は、「全学日本語プログラム」（JLPTUFS）において 2011 年度秋学期に改訂されたレベル名称であり、アンケート調査を実施した時点（2010 年度秋学期）での名称とは若干の異なりがある。初級（100）レベルは 1 学期間（15 週間）で初級を一通り学習し終える集中コース、初中級（200）レベルは同じく初級後半から中級の入口までをカバーする集中コースである。中級１（300）は中級前期、中級２（400）は中級の中程、中上級（500）は中級後半で、500 レベル終了時に日本語能力試験 N2 合格が目安となる。上級１（600）を経て、上級２（700）レベルでは日本語能力試験 N１合格が目安となる。超級（800）は既に日本語能力試験 N1 に合格し、大学の学部・大学院などの授業も十分に受講可能なレベルである。

[8] 地域分類は、外務省ホームページを参考としたものである。国別の回答者数内訳は、中国 14 名、イタリア・イギリス各 8 名、韓国 7 名、ロシア 6 名、モンゴル・アメリカ合衆国各 5 名、中国（香港）・ベトナム・カンボジア・スイス各 4 名、タイ・インドネシア・フランス・ブルガリア・ウズベキスタン各 3 名、台湾・ドイツ・オーストリア・ポーランド・トルコ・イラン・カナダ各 2 名、フィリピン・ラオス・ミャンマー・インド・スペイン・ポルトガル・オランダ・スウェーデン・リトアニア・チェコ・ルーマニア・アゼルバイジャン・メキシコ・ベネズエラ・チリ・シリア・エジプト・モロッコ・オーストラリアが各 1 名である。

[9] 以下百分率については、小数点以下第一位を四捨五入して記している。

400）レベル、4 名が上級レベルであった。よく使うとする回答者の国籍は様々で、特に偏りは見られなかった[10]。

(2) 電子辞書

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	62	21	8	3	22	1	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 71%が電子辞書をよく使うと答えている。使用率の高さは(1)の書籍タイプの辞書と対照的である。使用者の日本語レベルは初級から超級まで全レベルにわたる。一方、「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、21%の者は電子辞書を使わないと答えている。使わないという回答者の内訳は、初級～中級 1（100～300）レベルが 25 名中 18 名を占める。電子辞書を使わないとする 25 名のうち 8 名は書籍タイプの辞書をよく使うとしているが、この 8 名も含めて、これらの回答者全般によく使われているのはウェブ上のオンライン辞書と携帯電話のアプリケーションである。どのタイプの辞書も使わないという傾向を示したのは 4 名のみである[11]。

(3) 携帯電話のアプリケーション

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	15	8	12	19	63	0	117

「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、70%の者は携帯電話の辞書アプリケーションは使わないと答えている。一方、「非常によく使う」あるいは「よく使う」と答えた者 23 名を見ると、初級～中級 1（100～300）レベルが 12 名と半数を占めている。中級～中上級（400～500）レベルが 9 名と続く。よく使うと答えた上級（600）以上の者は 2 名のみであった。

---

[10] よく使うとした回答者の国籍は、タイ、ラオス、中国、韓国、モンゴル、イタリア、イギリス、ドイツ、スイス、トルコ、ウズベキスタン、シリアであった。

[11] 4 名の内訳は、初級（100）モンゴル・フランス各 1 名、初中級（200）カナダ 1 名、中級 1（300）モンゴル 1 名となっている。初級レベルでは、教科書に付随した語彙リスト（語句索引）を辞書代わりに日常的に使用するという事情もある。この 4 名のうち、中級 1（300）レベルの 1 名は、「その他に使用している辞書」として「日本語のテキストの語彙リストを使う」と記している。

(4) パーソナルコンピュータのアプリケーション

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	19	14	14	14	55	1	117

「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、全体の約 59%はパーソナルコンピュータの辞書アプリケーションは使わないと答えている。「非常によく使う」あるいは「よく使う」と答えている者は全体の約 28%で、使用者の日本語のレベルは初級から超級にわたる。

(5) ウェブ上のオンライン辞書

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	31	22	20	26	18	0	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 45%がウェブ上のオンライン辞書をよく使うと答えている。一方、「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせ、全体の約 38%は使わないと答えている。

以下、図 2 に上記(1)～(5)の結果をグラフで示す。使用傾向が明らかに出たのは、電子辞書であろう。「非常によく使う」と回答している者が約半数を占めるという特徴的結果が出ている。書籍タイプの辞書は、ほとんど使われないのではないかという予測があったが、実際には「時々使う」という回答が、他のどのタイプの辞書よりも多いという結果が見られた。

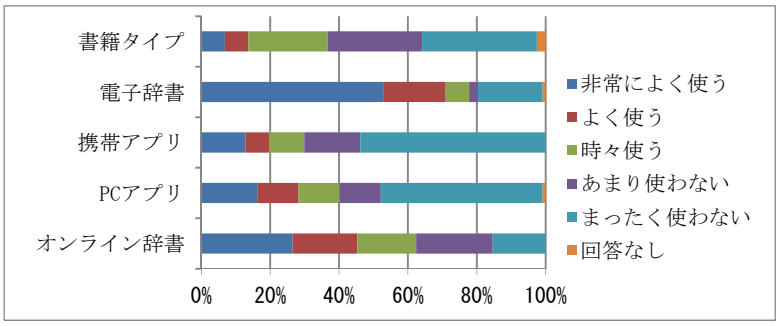

図 2　ふだん使用する辞書について

携帯電話のアプリケーションとパーソナルコンピュータのアプリケーションについては、「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると２～３割の回答者はこ

れをよく使うとしている。一方、「まったく使わない」という者もそれぞれ半数近くを占める結果となり、使用傾向は分かれている。

オンライン辞書については、これをまったく使わないという回答は、電子辞書をまったく使わないとする回答数よりも少ない。「非常によく使う」から「時々使う」までを合わせると、全体の約６割はオンライン辞書を何らかの形で使用していることになる。オンラインでの辞書の使用は、学習者に広く行き渡りつつある辞書使用の形態として、注目すべき１つの傾向を示していると考えられる。

4.3　辞書を使って行う活動について

ここでは、日本語を使ってどのような活動をする際に辞書を使うか、活動の種類別にその傾向を調べた結果を見る。

(1) 日本語のクラスのために、予習・復習をしたり、宿題をしたりする時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	57	38	14	7	1	0	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 81%がよく使うと答えている。「あまり使わない」と回答している７名のうち４名は初級～初中級（100～200）レベルである[12]。このレベルでは、テキストに付随した語彙リストがあるため、予習・復習等に辞書を使う必要性がさほどないためではないかと思われる。

(2) 日本語のクラスの課題として、スピーチの原稿や作文を書いたりする時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	73	33	7	3	1	0	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 91%がよく使うと答えている。使用率が高いのは、自分自身の表現を行うことがより求められる課題であるためであろう。一方「時々使う」から「まったく使わない」まで、この活動でさほど辞書を使わない傾向を示す 11 名には、初級から中級１（100～300）レベ

[12] 「まったく使わない」としている１名は超級（800）レベルである。

ルの回答者が 5 名、中級 2（400）レベルが 2 名含まれている[13]。

(3) 日本語以外の科目で、予習・復習をしたり、課題をしたりする時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	23	21	26	33	14	0	117

「非常によく使う」から「時々使う」までを含めると、全体の約 6 割は何らかの形で辞書を使用している。一方、日本語の科目とは異なり、「あまり使わない」と「まったく使わない」の回答も多く、合わせると全体の 40%は辞書を使わないとしている。このうち 21 名が初級～中級 1（100～300）レベルであり、この段階では日本語以外の科目として、英語で受講する科目を受講している可能性がある。

(4) 授業中にわからない言葉を調べる時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	51	36	23	6	1	0	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 74%がよく使うと答えている。

(5) 学校で、冊子や案内を読んだり、書類を書いたり、様々な手続きをする時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	21	22	38	20	13	3	117

「時々使う」という回答が最も多い。「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 37%はこのような活動で辞書をよく使い、「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、全体の約 28%はこのような活動で辞書を使わないとしている。使うとする回答者も使わないとする回答者も、日本語のレベルは初級から上級まで各レベルにわたる。学校生活でこのような手続きを遂行する際には、辞書だけが問題解決の手段ではなく、日本語のレベルに応じて英語訳を利用したり、しかるべき先に問い合わせたり、適宜周囲の助けを得るなどの方策がとら

[13] 残り 4 名は上級～超級（600～800）レベルである。この 11 名のうち 8 名は、(1)の予習・復習等でも同様に辞書を使わない傾向を示しており、3 名は逆に(1)ではよく使うと答えている。

れていることが考えられる。実際に初級（100）レベルの回答者が、通常これらの活動は英語で行うと注記している。また中級 1（300）レベルの回答者も、この活動に特定したものではないが、漢字が多く使用されている場合は、日本人の友人に手伝ってもらうと述べている。

(6) 学校以外の日常生活で、説明書や案内を読んだり、申込書を書いたり、様々な手続きをする時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	22	23	36	27	9	0	117

(5)とほぼ同様の結果となっている。「時々使う」という回答が最も多い。「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 38%はこのような活動で辞書をよく使い、「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、全体の約 31%はこのような活動で辞書を使わないとしている。使うとする回答者も使わないとする回答者も、日本語のレベルは各レベルにわたっている。

上記(5)でよく使うと答えた 43 名のうち 35 名は、学校以外のこのような活動の際もやはり辞書をよく使うと答えている。一方、上記(5)で使わないと答えた 33 名を見ると、19 名はこのような活動でもやはり使わないと答え、同様の傾向を示している。上記(5)で使わないとしたうちの残り 14 名は、(5)とは異なり、学校外のこのような活動の場合には「時々使う」あるいは「よく使う」と答えている。

(7) 日本語で書かれた論文や専門書を読む時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	55	24	11	14	10	3	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 68%がよく使うと答えている。使うとする回答者の日本語のレベルは初級から超級までにわたる。一方、「まったく使わない」とする 10 名の全員、および「あまり使わない」とする 14 名のうち 8 名はいずれも初級から中級(100～400)レベルである。使わないとする回答者は、その日本語のレベルから考えると、日本語で書かれた専門分野の論文等を、辞書を参照しつつ読むという活動はさほど頻繁に行う状況にないためではないかと思われる。実際に初級（100）レベルの回答者がこのような活動はしたこと

がない旨を注記している。

(8) 研究計画や論文を日本語で書く時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	57	26	10	7	14	3	117

(7)とほぼ同様の結果となっている。「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 71%がこのような時に辞書をよく使うと答えている。使うとする回答者の日本語のレベルは初級から超級までにわたる。一方、「まったく使わない」とする 14 名のうち 12 名、および「あまり使わない」とする 7 名のうち 6 名はいずれも初級から中級(100～400)レベルである。使わないとする回答者は、やはりその日本語のレベルから考えると、日本語で専門分野の研究計画や論文等を書くという活動自体は、頻繁に行う状況にないためではないかと思われる。

(9) 指導教員など目上の人に、日本語でメールを書く時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	29	35	28	13	11	1	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約半数の 55%はよく使うとしている。「時々使う」を含めれば全体の約 79%が使っていることになる。

(10) 学校以外の日常生活で、日本語の新聞や雑誌、本を読む時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	34	24	40	10	7	2	117

「時々使う」という回答が最も多い。「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の約 50%と半数がよく使っており、「時々使う」と合わせれば、全体の約 84%がこのような時に何らかの形で辞書を使っていることになる。

(11) 学校以外の日常生活で、日本語で書かれたインターネットの記事を読む時

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	28	22	41	18	8	0	117

上記(10)と同様に「時々使う」という回答が最も多い。「非常によく使う」および「よく使う」とも合わせれば、全体の約 78%は何らかの形で辞書を使っていることになる。ここで「非常によく使う」と回答した 28 名は、1 名を除き全員が上記(10)でもやはり辞書を使う傾向にあり、それら 27 名の上記(10)での回答は「非常によく使う」が 23 名、「よく使う」が 4 名となっている。

(12) そのほかの場合

そのほかに辞書を使用する場合として、日本人と話す時 4 名、町中で買い物をする時や駅の表示を確認したりする時 4 名、テレビを見ている時 3 名、日本人学生に外国語（母語等）を教える時 1 名という回答があった。

以下、図 3 に上記(1)～(11)の結果をグラフで示す。半数以上が「非常によく使う」あるいは「よく使う」と答えているのは、スピーチの原稿や作文を書く時 (91%)、日本語のクラスの予習・復習・宿題をする時（81%）、授業中分からない言葉を調べる時 (74%)、研究計画や論文を書く時 (71%)、論文や専門書を読む時 (68%)、指導教員など目上の人にメールを書く時（55%）である。

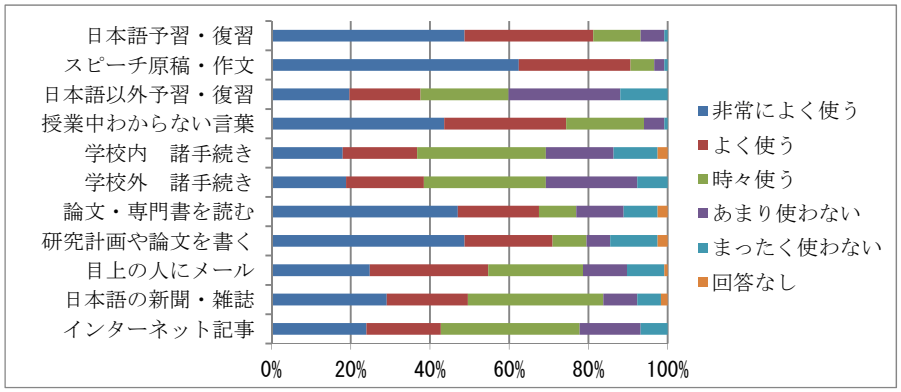

図 3　辞書を使用する活動

4.4　日本語で文章を書く時の辞書の使用について

ここでは、日本語で文章を書く際にどのような辞書を使うか、辞書のタイプを調べた結果を見る。

(1) 英日辞書（英語で言葉を引き、あてはまる日本語を調べるタイプの辞書）

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	35	31	26	15	10	0	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると、全体の半数以上の約 56%が英日辞書をよく使うと回答している。日本語レベルは初級から超級まで全レベルにわたるが、超級（800）レベルは 4 名のみである。よく使うと答えているこれら 66 名のうち 48 名は、母語あるいは母語と同等に使える言語として英語を挙げている。「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせた 25 名も、日本語のレベルは初級から超級にわたる。英語を母語とする者も 2 名含まれている。

(2) 英語以外の言語から日本語を調べるタイプの辞書

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	33	21	21	16	25	1	117

「非常によく使う」と「よく使う」は合わせて計 54 名、全体の約 46%である。

(3) (2)で「使う」とした場合、どの言語から調べるか（複数回答可）

中国語 20、ロシア語 9、韓国語 8、イタリア語・ドイツ語・フランス語各 7、モンゴル語 5、ベトナム語・タイ語各 3 、その他インドネシア語・カンボジア語・ミャンマー語・スペイン語・スウェーデン語・ポーランド語・チェコ語・ブルガリア語・ルーマニア語・トルコ語・ペルシア語・アラビア語各 1 ずつの回答があった。いずれも回答者の母語あるいは母語と同等に使える言語が使用されている。

(4) 日本語の国語辞典（日本語で言葉を引き、日本語の説明を調べるもの）

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	13	25	30	22	27	0	117

「時々使う」という回答が最も多い。「非常によく使う」あるいは「よく使う」と答えた 38 名のうち 9 割以上の 35 名は中級 2（400）レベル以上であり、うち 26 名は上級から超級（600～800）レベルである。初級（100）レベルで国語辞典をよく使うと回答した者はない。一方「あまり使わない」と「まったく使わない」

を合わせた 49 名のうち 46 名が初級から中上級（100～500）レベルであり、上級（700）レベルは 3 名のみである。国語辞典を使うかどうかには、日本語のレベルが関係しているものと思われる。

(5) 類語辞典（日本語で言葉を引き、その類義語を調べるもの）

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	2	6	29	29	51	0	117

「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、全体の約 68%は類語辞典は使わないと答えている。類語辞典を「非常によく使う」あるいは「よく使う」と答えた 8 名は少数派で、初中級から超級（200～800）レベルに散らばっている。この中には、インタビュー調査を行った結果、辞書全般を非常に工夫して使いこなしていることがわかった回答者 1 名が含まれている。

(6) 漢字辞典（日本語で説明が書かれているもの）

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	12	24	25	28	28	0	117

「あまり使わない」と「まったく使わない」を合わせると、全体の約 48%は日本語で説明の書かれた漢字辞典は使わないと答えている。「非常によく使う」と「よく使う」を合わせた 36 名は全体の約 31%で、初級から超級（100～800）まで全レベルにわたる。

(7) 漢字辞典（日本語以外の言語で説明が書かれているもの）

	非常に よく使う	よく使う	時々使う	あまり 使わない	まったく 使わない	回答なし	計
人数(人)	26	20	22	13	36	0	117

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると 46 名で、上記(6)の日本語の漢字辞典をよく使うとした 36 名よりは上回っている。レベルは初級から超級（100～800）までにわたる。一方、「まったく使わない」という回答者も 36 名と全体の約 3 割いる。このうち上記(6)ではよく使うとしている者は 9 名、また 2 名は日本語の漢字辞典については「時々使う」と答えている。(6)も(7)もいずれの漢字辞典

も使わないとする回答者は25名である[14]。

(8) (7)で「使う」とした場合、どの言語で説明が書かれているか（複数回答可）

英語51、中国語14、フランス語5、ロシア語4、タイ語・イタリア語・スペイン語・ドイツ語各3、韓国語・ベトナム語各2、インドネシア語1であった。5名の回答を除き、いずれも回答者の母語あるいは母語と同等に使える言語である。

(9) 日本語で文章を書く時、そのほかに使っている辞書

ここに「和英辞典」（日本語で言葉を引き、英語であてはまる言葉を調べるタイプの辞書）と記入している回答者が 2 名見られた。この後インタビュー調査を行った際、辞書の使い方の工夫の1つとして、電子辞書に搭載されている「和英辞書」の例文を見るという方法があることが、複数の回答者によって挙げられている。そのうち1名は、この項目で「和英辞典」を挙げている回答者である。

以下、図4に上記(1)(2)、(4)～(7)の結果をグラフで示す。

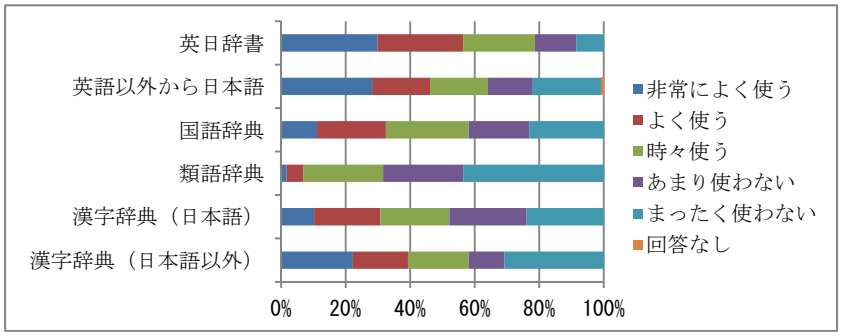

図4　日本語で文章を書く際に使用する辞書

4.5　辞書の例文について

回答者がよく使う辞書について、そこに載っている例文を評価してもらった。

(1) 例文の数が豊富だ

	強く同意する	どちらかと言えば同意する	どちらとも言えない	どちらかと言えば同意しない	全然同意しない	回答なし	計
人数(人)	27	36	35	16	3	0	117

[14] 日本語の漢字辞典も他の言語で書かれた漢字辞典も、いずれも「あまり使わない」あるいは「まったく使わない」と回答している人数である。日本語レベルは初級～超級（100～800）にわたる。

「強く同意する」と「どちらかと言えば同意する」を合わせると、約半数の 54%が辞書の例文の数は肯定的に評価している。ただし、どちらとも言えないという評価も 3 割近くを占めた。それぞれの回答者がどのタイプの辞書をよく使うかは多岐にわたり、特にどのタイプの辞書の例文がよいとされているかという偏りは見られなかった。

(2) 古典の例（現代語では使わないもの）が多い

	強く同意する	どちらかと言えば同意する	どちらとも言えない	どちらかと言えば同意しない	全然同意しない	回答なし	計
人数(人)	9	19	40	31	18	0	117

「どちらとも言えない」が最も多い。「どちらとかと言えば同意しない」と「全然同意しない」を合わせると全体の約 42%で、これらの回答者は、よく使う辞書の例文を、現代語の観点から見てマイナスには評価していないことになる。

(3) その文が使われる前後の文脈がわからない

	強く同意する	どちらかと言えば同意する	どちらとも言えない	どちらかと言えば同意しない	全然同意しない	回答なし	計
人数(人)	4	25	41	26	19	2	117

「どちらとも言えない」が最も多い。一方、「強く同意する」と「どちらかと言えば同意する」を合わせた 29 名、約 25%の回答者については、例文の前後の文脈がわかりにくいと評価していることになる。

(4) 大学生活で必要となるアカデミックな内容の例文が多い

	強く同意する	どちらかと言えば同意する	どちらとも言えない	どちらかと言えば同意しない	全然同意しない	回答なし	計
人数(人)	14	29	47	20	6	1	117

「どちらとも言えない」が最も多く、全体の約 40%である。「強く同意する」と「どちらかと言えば同意する」を合わせ、大学生活で必要となるアカデミックな内容の例文が多いと評価しているのは全体の約 37%である。

(5) 例文についてそのほかに気づいた点（自由記述）

初級（100）レベルの回答者１名は、例文が未習の文型によって成り立っており、文構造がしばしば複雑であると答えている。中級２（400）レベルの回答者１名は、母語（ロシア語）から日本語を調べる辞書には例文がないため、和英辞典を併用していると答えている。同じく中級２（400）レベルの回答者１名は、パーソナルコンピュータのアプリケーションとオンライン辞書をよく使うが、収録語彙が十分ではなく、必ずしも日本語の意味が母語の対訳語と一致するわけではないと記入している。また、超級（800）レベルの回答者１名は、その語を実際にどのように使うのかを知るためには例文が足りないとし、中上級（500）レベルの回答者１名は、使用される適切な文脈については日本語母語話者に確認しなければわからない場合が多いとしている。このように、辞書の例文についての評価は、個別の質問項目の結果よりも、自由記述欄からその問題点が読み取れる傾向が出た。

以下、図５に例文についての評価の結果をグラフで示す[15]。

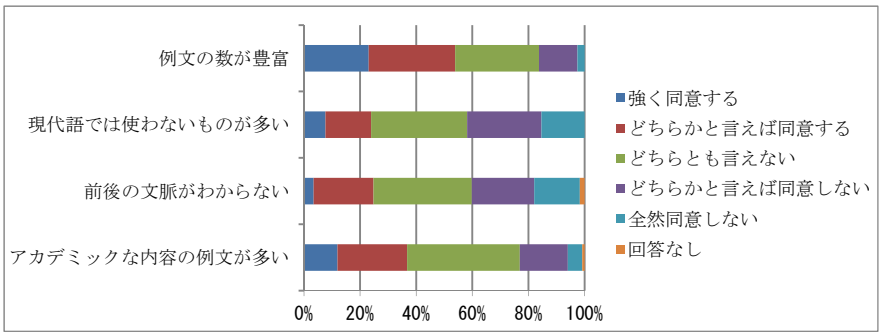

図５　辞書に載っている例文の評価

4.6　電子辞書やアプリケーションの種類

それぞれのタイプの辞書を使うとした回答者に、詳しい情報を求めた。

(1) 使っている電子辞書（複数回答可）

	CASIO	CANON	その他	回答なし	計
人数（人）	65	10	15	2	92

「その他」の内訳は、「SHARP」8、「NintendoDS 漢字そのまま楽引辞典」3、

[15] 結果的にいずれの項目も「どちらとも言えない」という回答が 30～40%と多く、辞書の例文の質を評価するという観点が十分に伝わらなかった可能性も考えられる。

「iPod touch」2、「Zaurus」1、「Besta」1 となっている。この 92 の回答の他に、携帯電話名（iPhone）やオンライン辞書名を挙げた無効な回答が 2 あった。

(2) 電子辞書の中に、母語から日本語を調べる辞書が入っているか

	入っている	入っていない	計
人数（人）	53	39	92

「入っていない」という回答者の母語は、タイ語、ベトナム語、カンボジア語、ミャンマー語、インドネシア語、ジャワ語、ヒンディー語、モンゴル語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、オランダ語、スウェーデン語、ドイツ語、ポーランド語、チェコ語、ロシア語、ブルガリア語、トルコ語、アゼルバイジャン語、ウズベク語、ペルシア語、アラビア語である。

(3) 電子辞書の中に、日本語から母語を調べる辞書が入っているか

	入っている	入っていない	計
人数（人）	54	38	92

上記(2)の回答が「入っていない」場合は、(3)も「入っていない」となっている。ただし、(2)は「入っていない」が、(3)は「入っている」との答えが 2 名（母語モンゴル語・電子辞書 CANON、同ポーランド語・CASIO）、(2)は「入っている」が、(3)は「入っていない」との答えも 1 名（カンボジア語・CASIO）見られた。

(4) 使っている携帯電話（複数回答可）

	iPhone	au	その他	回答なし	計
人数（人）	19	12	3	3	37

「その他」の内訳は、「SoftBank」2、「Samsung」1 である。携帯情報端末は日進月歩の感があり、2011 年 1～2 月の調査時にまだ少数派と見られたスマートフォンについては、短期間の間にその使用が増え、2011 年 10 月現在では日常的にかなりの使用者が見られるようになっている。もはや、この類の機器を「携帯電話」というカテゴリーにくくること自体に見直しが必要になるかと思われる。同一の携帯情報端末名（iPod touch）を上記(1)の「電子辞書」とこの「携帯電話」の

双方に記入している回答者も１名あった[16]。

(5) 携帯電話の辞書アプリケーション（複数回答可）

	詞[17]	本	明鏡国語辞典	その他	回答なし	計
人数（人）	16	2	1	16	5	40

「その他」の内訳は、iPhone および iPod touch 用のアプリケーションとして「Jishobot」、「shinKanji」が各 2、「Japanese2.0」、「iTranslate」、「WISDOM」が各 1、その他のアプリケーションとして「Au:モバイル辞書」2、「大辞林」、「広辞苑」、「デイリーコンサイス和英・英和辞典」が各 1 挙げられている。

(6) パーソナルコンピュータの辞書アプリケーション（複数回答可）

ウェブ上からダウンロードするなどして、パーソナルコンピュータにインストールして使用するタイプの辞書アプリケーションである。様々な回答が挙がった中で、3 名以上から名前が挙がったのは、「wakan（和漢）」9、「Rikaichan」4、「YARXI」4、「Babylon」3 という 4 種である[18]。回答者の日本語のレベルは初級から超級（100～800）にわたる。また、以下の(7)に当てはまるオンライン辞書名（google translate）を挙げている無効な回答が 2、および回答なしが 13 あった。

(7) ウェブ上のオンライン辞書

ウェブ上に公開されているオンラインタイプの辞書である。インターネットに接続してアクセスする。(6)と同様に様々な回答が挙がったが、3 名以上から名前が挙がったのは、「Denshi Jisho-Online Japanese dictionary」23、「google translate」16、「Yahoo!辞書」5、「和独辞典」5、「JimBreen's WWWJDIC」3 の 5 種である[19]。

---

[16] ここでは、その１名の携帯情報端末についての回答は (1)「電子辞書」の方に含めている。

[17]「詞」は iPhone 用のフリー（無料）の日本語辞書アプリケーションである。

[18]「wakan（和漢）」（http://wakan.manga.cz/）は日本語および中国語の学習者向けに開発されたフリーウェア、「Rikaichan」（http://www.polarcloud.com/rikaichan/）は、ウェブ上の日本語テキスト上で働くポップアップタイプの辞書、「YARXI」（http://www.susi.ru/yarxi/）はロシア語の漢字辞書アプリケーション、「Babylon」（http://babylon.japan21.co.jp/index.html）は翻訳ソフトウェアである。

[19]「Denshi Jisho-Online Japanese dictionary」（http://jisho.org/）は日英語のオンライン辞書で、これを挙げた 23 名の回答者は初中級から超級（200～800）の各レベルにわたる。「google translate」（http://translate.google.com/）は多言語対応の翻訳ツールであり、回答者 16 名のうち 9 名が初級～中級 1（100～300）、4 名が中級 2～中上級（400～500）、3 名が上級（700）レベルであった。「Yahoo!辞書」（http://dic.yahoo.co.jp/）はオンライン上で既存の各種辞書が検索できるサイトで、

回答者の日本語のレベルは初級から超級（100～800）にわたる。単に「国語辞典」とするなど特定できない回答 3 を含め、回答なしは 11 であった。

4.7　辞書を使う時の工夫など

(1) 辞書を使う時、気をつけていることや工夫していること

	ある	ない	回答なし	計
人数（人）	22	80	15	117

「ある」と答えた回答者は、中級 1～超級（300～800）にわたる。初級および初中級（100～200）レベルでは見られなかった。

(2) (1)で「ある」と答えた人は、具体的に（自由記述）

上記 22 名全員が記入している。「使い方を知りたいので必ず例文を見る」など、例文の重要性が指摘されていること、および「良い例を多く探すため複数の辞書を併用する」など、その方策について述べられている点が特徴的である[20]。

(3) 辞書を使う時、不便だと感じること

	ある	ない	回答なし	計
人数（人）	34	77	6	117

「ある」と答えた回答者は、初級～超級（100～800）の全レベルにわたる。

(4) (3)で「ある」と答えた人は、具体的に（自由記述）

上記(3)で「ある」とした 34 名全員が記入している。例文が少ないことや、ニュアンスがわかりにくいこと、電子辞書に搭載されている辞書が、日本語を勉強する外国人のための辞書でないなどの問題点が指摘されている。

これを挙げた回答者の国籍は中国（香港を含む）4 名とチェコ 1 名である。「和独辞典」（http://wadoku.de/）は日独語のオンライン辞書で、これを挙げた 5 名はスイス、ドイツ、オーストリアの学習者でいずれも母語がドイツ語である。「Jim Breen's WWWJDIC」（http://www.csse.monash.edu.au/~jwb/cgi-bin/wwwjdic.cgi?1C）は多言語対応の日本語オンライン辞書である。

[20] 4.7 節で述べるアンケートの自由記述欄の詳細については、稿を改めて分析を行う予定である。

５．辞書について今後必要になると思われること

以上見てきた調査結果をふまえ、今後日本語学習者の「辞書」使用に関しては、以下の２つの側面から考えることが必要であろうと考える。

5.1　学習者の辞書使用のスキル養成

まず、学習者には、特に中級の入口の段階から上級にかけて、自らの日本語学習において辞書をどのように使用するかを学習ストラテジーの１つとして自覚的にとらえ、自律的学習の確立に役立てていくことが必要であろう。

学習者自身が辞書の使用をめぐって自ら工夫を行っている様々な点は、他の学習者にとっても参考になる点が多い。そのようなリソースの利用法について、学習者同士で情報を共有することも有益であると思われる。

5.2　学習リソースである辞書そのものの改善

学習リソースである辞書そのものについては、日本語学習者を対象に考えた場合、良質な例文提示の工夫がより求められる。基本的な語彙を用いた、文法構造の明確な例文、かつ学習者が必要とする文脈で使用可能かどうかが判断できるような例文である。大学レベルで学ぶ日本語学習者にとっては、必要となるトピックに合致した例文も必要である。

なお、本アンケート調査と並行して計 8 名の学習者に、辞書使用について個別にインタビュー調査を実施した。インタビューにより見えてきた学習者の辞書使用の工夫の詳細については、稿を改めて考察を行いたい。

付記：本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成 22～23 年度挑戦的萌芽研究「留学生の文章産出時における辞書使用の実態調査–言いたい日本語はどう見つけるか」研究代表者：鈴木智美、課題番号：22652047）の助成を受けて行われている。

引用文献

鈴木智美（2010）「辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現―『JLPTUFS 作文コーパス』の作文から見えてくること―」『2010 世界日本語教育大会（ICJLE）予稿集』（DVD 版）1436-0-1436-9

鈴木智美（2011a）「留学生の辞書使用についての実態調査―東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査結果―」『第 9 回日本語教育研究集会予稿集』pp.10-13

鈴木智美（2011b）「留学生の辞書使用についての実態調査―東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析」ICJLE2011 世界日本語教育研究大会発表資料（2011 年 8 月 21 日於天津外国語大学）

東京外国語大学留学生日本語教育センター「全学日本語プログラム」運営委員会（2009）「全学日本語プログラム学生アンケート集計結果」（2009 年度春学期・秋学期）

東京外国語大学留学生日本語教育センター　鈴木智美・中村彰（編）（2011）『「JLPTUFS 作文コーパス」の構築』東京外国語大学留学生日本語教育センター教育研究開発プロジェクト「JLPTUFS 作文コーパス」報告書（平成 20（2008）年度～平成 22（2010）年度）（別添 CD あり）